

鳥類の生態と防除方法について

有限会社 たかはし工営 高橋 潤

1、ハト

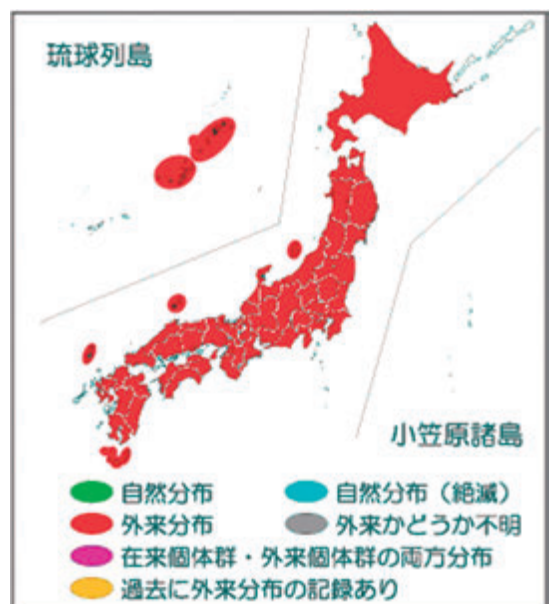
鳩は、ハト目・ハト科に属する鳥類の総称である。体に比べて頭が小さく、胸骨、胸筋が発達してずんぐりとした体型が特徴である。日本に生息する鳩には、アオバト、カラスバト、キジバト、シラコバト、ドバトなどが知られている。このうちドバトはカワラバトの飼養品種が再野生化したものとされ、野鳥とはみなされないこともある。



過去にカワラバトは日本では狩猟対象だったが、誤ってレース鳩を撃ってしまう危険性がある等の理由から、本種はその対象から外された経緯がある(飼鳥を射殺すると動物愛護法に触れる)。なお、日本でカワラハト目ハト科に属する鳥類の一種である。本来ヨーロッパ、中央アジア、北アフリカなどの乾燥地帯に生息する鳥だったが、食用や伝令用として家禽化され、それが伝書鳩やレース鳩としてなどとしても利用されたほか、愛玩用の品種も多数作られた。日本には奈良時代には既に持ち込まれていたと言われ、神社仏閣などに住み着いたことから「だうばと(堂鳩)」「たうばと(塔鳩)」などと呼ばれていたのがドバト(土鳩)の語源ではないかと言われている。従ってカワラバトは本来の野生種を指し、ドバトは再野生化したものを指すが学術的には同じ種である。ドバトの次によく見かけるキジバトは現在でも狩猟対象である。

2、分布

海道を含む日本全土で普通に見ることができる。特に都市部を中心に非常に多く見られる鳥で、その数は増え続けている。日本以外ではユーラシア大陸、ヨーロッパを中心に留鳥として世界的に広く分布する。長らく人間と関わってきた本種は、人間にとっても密接した鳥で、工業地面積が増えると出現率は上がり、森林面積が増えると低下することがわかっています。



画像：国立研究開発法人 国立環境研究所より

3、特徴と生態

- 全長は30～35cm。体重は約300g家禽時代に様々な品種が作られたことから、現在国内で見られるカワラバトも様々な羽装を呈する。キジバトは羽のウロコ模様が特徴的であり、本種との識別は容易である。
- 基本的に草食性であるが、昆虫なども食べることもある。

- 通常2個の固着性の卵を産む。孵化までは16～20日で、育雛期間は35～40日程度。他の鳩類と同じく雛には蛋白質に富んだピジョンミルクと呼ばれるミルク状の嘔吐物を与えるので、ほとんど一年中繁殖することができる。育雛いくすうをしている最中に次の産卵をすることもあり、時に育雛と抱卵を同時期に行う。よって年間7、8回の繁殖が可能である。この繁殖能力の高さと、天敵である猛禽類の減少が急激な個体数増加の原因となっている。野生種のカワラバトは本来、岸壁の割れ目などの高い場所に営巣していた鳥なのでその習性から市街地においてはマンション等の人工建造物が恰好の営巣場所となっており、その糞害が問題視される。

4、被害

- 市部で大量に繁殖している地域では、歴史的建造物の汚損などが深刻である。放置されて乾燥した糞は、金属の腐食を促進させる作用もある。またカビの一種であるクリプトコッカス・ネオホルマンズが堆積たいせきして乾燥した糞の中で繁殖し、免疫力の落ちた人間が吸い込むとクリプトコッカス症にかかる場合がある。そのほか集団で生息する事から個体間の伝染も深刻でその羽にはダニなどの吸血虫が繁殖している事もしばしばであり、人の住む家屋に住み着いたハトからこれらダニの被害を受けることもある。近年ではカワラバトは生息域を郊外へと広げており、発芽したばかりの大豆などが食害を受けることもある。



5、対策

①調査

被害状況、営巣個所、飛来羽数、群の大きさ、作業方法の検討といった一連の調査を行います。各種、飛来防止資材を併用して効果を確実にします。

②施工方法

各種、飛来防止資材を併用して効果を確実にします。

- (1)直接的遮断
防鳥網



- (2)物理的飛来妨害
テグス、剣山など



- (3)追い払い
爆音機、音声、防鳥テープなど

- (4)化学物質による摂食防止
忌避剤



- (5)駆除・個体数管理
狩猟、駆除、生息地管理

いろいろな施工方法がありますが、状況により施工対策が変わってきますので、調査をしっかりし、対策を考えていくことが重要です。

施 工 例

